

分野： I 小児・成人ぜん息に関する調査研究
① 高齢ぜん息患者の状況に応じた自己管理手法

I-①

委託業務名： ライフスタイル適合型デジタルデバイスによる気管支喘息の新規管理法の研究と高齢者ぜん息患者への応用

調査研究代表者氏名： 福永 興 壱

1 評価項目						
5点:大変優れている(A判定) 4点:優れている(B判定) 3点:普通(C判定) 2点:やや劣っている(D判定) 1点:劣っている(E判定)						
	5点	4点	3点	2点	1点	平均点
(2) 研究成果目標の達成度	0人	4人	2人	0人	0人	3.67
(3) 研究計画の妥当性	0人	2人	4人	0人	0人	3.33
個別評価(第3評価):(2)(3)の平均						3.50
(6) 総合評価(第2評価)	0人	3人	3人	0人	0人	3.50
全体評価(第1評価):(2)(3)(6)の平均						3.50

2 記述評価
・新たな肺機能検査をパラメーターとした自己管理方法ができる可能性がある。 ・進捗状況は良好とみられる。 ・余力があればPEFだけでなく、又はFEV1を指標として使えないか。 ・確立されようとしている内容は、Dxの時代にふさわしい内容ですが、システムの応用を視野に入れた内容でプロジェクトを組み立てると、よりその価値や実世界における診療への貢献の仕方が提示できると思いながら拝聴しました。対象となる年齢層、測定に関するvalidation、そしてむしろ無作為に依頼して断られるのではなく、本システムを使用して例えばアドヒアランスの改善をはかることができる、気候の変動と喘息の症状の変動がきちんと記録されより明確に回答が得られ、その対象を年齢で層別化することで加齢と気候の変動と喘息症状が解析して結果を示すことが近道ではないかと考えながら拝聴しました。 ・喘息症状のコントロールが以前より容易になった現在、ピークフローの測定が進むことが喘息を軽快させることにどう繋がるのか(たとえば症状に合わせた適切な薬剤の使用量の調節などがピークフロー測定継続群では非継続群に比して有意に良くなったなど)を明らかにすることが必要ではないか。それがないと、ピークフロー測定のデバイスをデジタル化したことにより喘息症状の改善が見られたとしても、それはデジタルデバイスの使用に対応できた患者群の特性によるバイアスの可能性がつきまとうのではないか。 ・次年度に持ち越されることになった環境要因と臨床アウトカムとの関連解析について、確実に進めてほしい。 ・近未来の高齢者ぜん息コントロールのあり方を示唆する研究である。長期フォローアップのデータ解析結果が待たれる。 ・現状の研究成果はアプリの利用状況に関わる検討に留まっている。喘息管理アプリを利用することの効果が増悪予防・症状軽減に結びついているかどうかについて、データに基づく検証が必要と思われる。